信州大学 大学史資料センター企画展
「野尻湖発掘を支えた信州大学の人びと」実施報告

坂　元　英　恵（信州大学 大学史資料センター）
田　中　圭　美（信州大学 大学史資料センター）

はじめに

信州大学 大学史資料センター（以下、「大学史資料センター」）では、2023（令和 5）年 11 月 3 日（金）から 2024（令和 6）年 1 月 18 日（木）まで、信州大学中央図書館（以下、「中央図書館」）の展示コーナーにおいて、第 6 回企画展「野尻湖発掘を支えた信州大学の人びと」（以下、「当展」）を開催した。1962（昭和 37）年の第 1 次発掘から 60 年以上の歴史がある野尻湖湖底発掘と、それを支えた信州大学人の活動を発掘の歴史と資料類と共に紹介した。

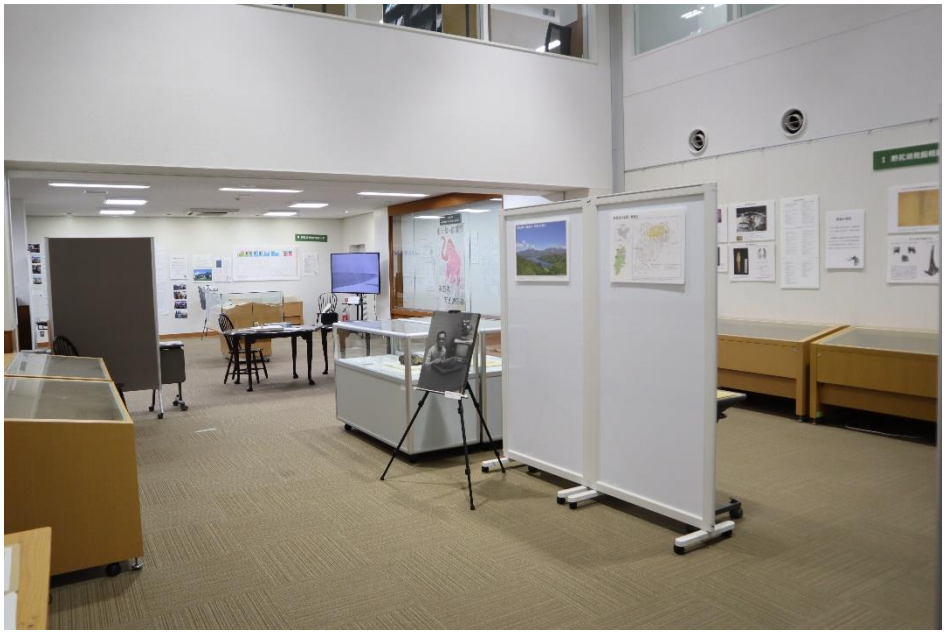

写真１　会場全景

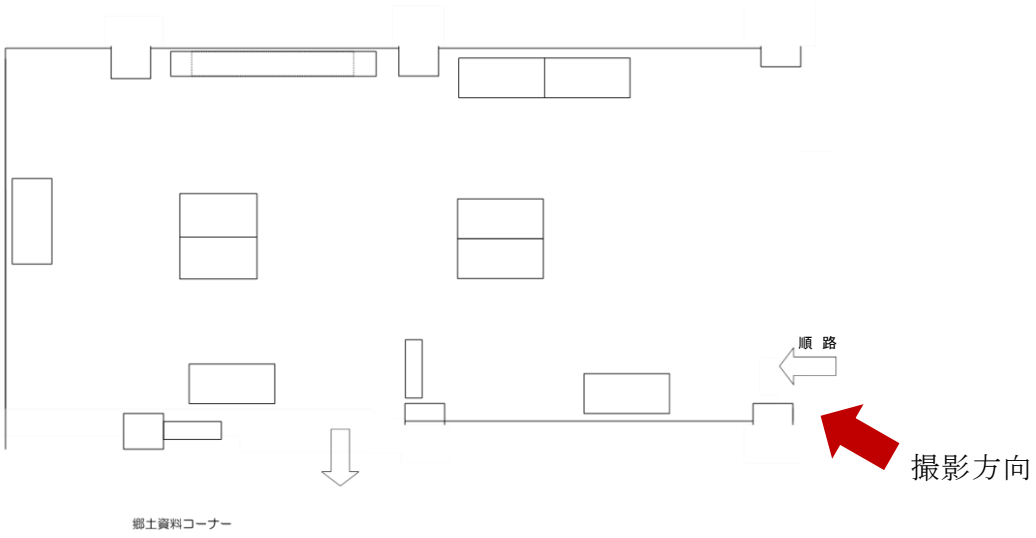

図１　展示会場図

１．展示概要

大学史資料センターでは 2018（平成 30）年より企画展を毎年開催しており、初回から第 3 回までは信州大学全体の歴史に関わる内容、第 4 回企画展「SUNS－人をつなぐ・キャンパスをつなぐ－」[1)2)]と第 5 回「明治・大正期 信濃博物学の夜明けと長野県師範学校－矢澤米三郎とライチョウ標本を中心に－」[3)4)]は信州大学に関係する事柄からテーマを絞った展示を企画・実施した。第 6 回となる今回の企画展においても、信州大学に纏わる展示を行うことを検討し、野尻湖における湖底発掘と信州大学の人びとの関わりに着目した。

２．展示準備

当展の展示構想が最初になされたのは、2021（令和 3）年 11 月のことであった。翌年の 2022（令和 4）年 11 月に企画展の計画を野尻湖ナウマンゾウ博物館の近藤洋一館長に伝え、展示の趣旨とともに、信州大学に関係する人物が野尻湖発掘調査にどのように関わったのか紹介するための協力を依頼した。その際、野尻湖ナウマンゾウ博物館で所有・保管している 1960 年代の発掘調査関係資料について信州大学でアーカイブ化してほしいと近藤館長から申し出があった。企画展に必要なデータの確保と、発掘調査資料データのデジタル保存のため、資料を一時的に預かりアーカイブ化の作業を行った。野尻湖ナウマンゾウ博物館より預かった資料は通称「仁科資料」と呼ばれているものである。豊野層研究グループに在籍していた研究者・仁科良夫氏が野尻湖ナウマンゾウ博物館に寄贈した、第 1 次から第 5 次までの野尻湖

発掘に関する文書類である。資料は 2 冊のファイルからなり、それぞれ『野尻湖発掘（一～四次資料）仁科』『第五次野尻湖発掘　1973 年 3 月』とタイトルが付けられていた。

まずは仁科資料をリスト化するため、ファイルに綴じられていた文書類を新たにクリアリーフに 1 枚ずつ入れ、元の秩序は変えずに別ファイルに綴じ直したうえで、新たに元ファイルに綴じられていた順番で文書に番号を付けた。『野尻湖発掘（一～四次資料）仁科』はファイル A の No.1～No.20、『第五次野尻湖発掘　1973 年 3 月』はファイル B の No.1～No.37 とした。全ての資料に付番後、リストを作成した。リストは 11 の項目からなり、資料名や日付、制作者のほか関連発掘時期などを記した。リスト作成の後、すべての仁科資料の撮影を行った。作成したリストと紐づけを間違いなく行うため、撮影の際には資料のリスト名を記したカードを用意し、共に撮影した。仁科資料には藁半紙以外に青焼や感熱紙と思われるものも含まれており、原物の長期保存は難しい可能性がある。今回アーカイブ化したことで、貴重な資料の情報が後世に残ることを願いたい。

また、野尻湖発掘調査団が編集し、野尻湖ナウマンゾウ博物館が発行している『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』を確認した。これは発掘に参加した専門家による報告書で、発掘調査の度に発行されている。各発掘において発見された出土品に関する情報の他、それまでの発掘成果を研究して判明した新事実や見解などが掲載されている。その他、野尻湖発掘調査団による多くの著作からも情報を得た。参考文献リストは文末に記載する。

実際に発掘が行われている様子を取材するため、2023 年 3 月に行われた第 23 回野尻湖発掘調査の現地取材を行った。2018 年に実施された第 22 次発掘から、新型コロナウイルスの影響による 3 回の延期を経て、5 年ぶりの発掘であった。第 23 次発掘は準備期間も含めて 3 月 18 日～27 日まで行われ、参加人数は 210 名、688 点の出土品が発見されるという成果があった。

野尻湖発掘の特徴のひとつとして、市民参加型調査であることがあげられる。専門家のみで行われる発掘ではなく、子供から大人まで、一般の参加者と専門家が共に発掘調査を行っている。全国に 23 カ所ある「野尻湖友の会」に入会すれば、発掘に参加できるようになる。信州大学からも、教育学部の竹下欣宏准教授とそのゼミ生が今回の発掘に参加した。

野尻湖発掘に大きく関わった信州大学の人物への聞き取り調査として、第 12 次と第 13 次発掘時に野尻湖発掘調査団団長（以下、「団長」）を務めた理学部の酒井潤一名誉教授と、第 16 次から第 21 次発掘まで団長を務めた教育学部の赤羽貞幸名誉教授にインタビューを行った。また、現在野尻湖発掘に関わっている竹下准教授にもインタビューし、後日、発掘に参加した竹下ゼミの学生へのインタビューが叶った。現役学生の意見を聞ける貴重な機会として、ZOOM を利用しインタビューを行った。このインタビューの様子は展示会場の大型ディスプレイで録画映像を上映した。その詳細は後述する。

展示を行う中央図書館の展示コーナーで、60 年を超える野尻湖発掘の歴史全ての紹介は難しいと当初より考えていた。発掘初期の第 1～4 次発掘では団長を医学部の鈴木誠教授が、発掘調査事務局局長を教育学部の斉藤豊講師が務めており、特に初回である第 1 次発掘を中心

とした展示を最初は検討した。しかし酒井名誉教授、赤羽名誉教授へのインタビューの際に、野尻湖発掘の歴史における第 5 次発掘の存在の大きさを伺った。

第 4 次発掘（1965（昭和 40）年）の後、野尻湖発掘は 8 年間の休止期間に入り、その間に発掘資料の整理と研究が行われた。第 5 次発掘の再開は、第 23 次発掘まで続いている野尻湖発掘調査の土台となったといえる。第 5 次発掘の意義として、長期休止後の再開であったことと、第 5 次発掘から、理学部地質学教室（1966（昭和 41）年設置）が野尻湖発掘調査事務局（以下、「事務局」）を担ったことがあげられる。事務局の運営には、理学部を中心とする多くの学生が携わった。第 1 次から第 4 次までは発掘調査団や事務局運営に医学部と教育学部の教員が携わっており、第 5 次発掘から発掘と資料整理に理学部が大きく関わるようになる。関係人物や学部の移り変わりこそあるものの、信州大学は野尻湖発掘に関わり続けてきた。当展では野尻湖発掘の歴史を取り上げながら、信州大学と野尻湖発掘調査の関係を紹介することとした。

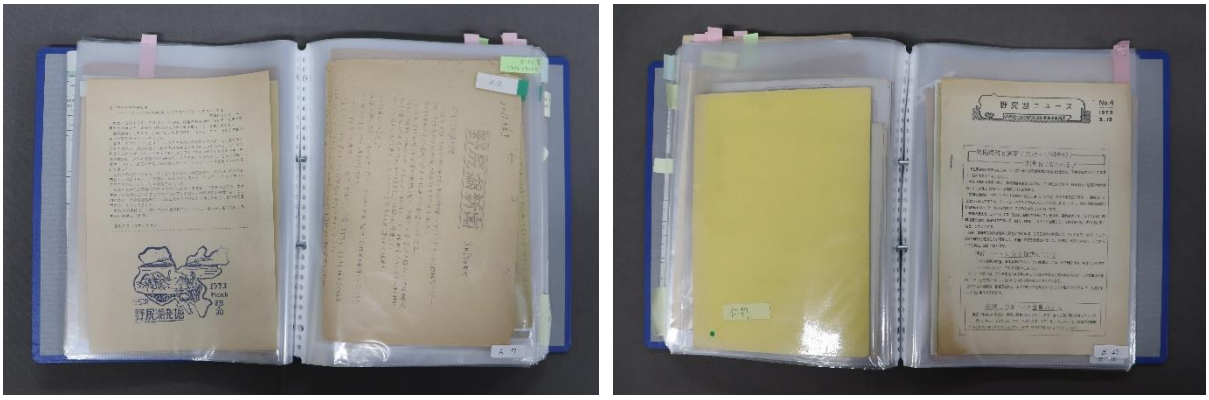

写真２・３　仁科資料

３．展示の構成と内容

展示は中央図書館の展示スペース全体を使用し、2 つのコーナーと 1 つのトピックで構成した。以下にその概要を紹介する。

３－１．野尻湖発掘概観

最初のコーナーでは、野尻湖発掘がどのようにして始まったのかを紹介した。日本では第二次世界大戦後、学術研究の民主化が叫ばれ、地質学分野では 1947（昭和 22）年に地学団体研究会（地団研）が結成された。考古学、人類学の各分野との学際的・横断的研究が 1950 年代から 60 年代にいくつかのフィールドで始まり、そのうちの 1 つが野尻湖発掘である。野尻湖において発掘調査が開始される前提として、戦前から続いてきた学術的研究と、それを支える教育的基盤（長野県師範学校と信濃教育会・教員の自主的研究）の伝統があげられる。

会場ではまず、野尻湖において化石が発見される前の野尻湖研究について紹介した。野尻湖に関する最初の学術論文である「野尻湖に就て（其一）」「野尻湖に就て（其二）」は、『信濃博物学雑誌』(27)(28)に掲載された。野尻湖発掘調査は1962年に始まるが、この論文は1907（明治40）年と1908（明治41）年に発表されている。

1948（昭和23）年に、野尻湖畔で旅館を営んでいた加藤松之助がナウマンゾウ臼歯の化石を発見した。この発見が、後の野尻湖発掘へのきっかけとなる。その後、野尻湖湖底の無土器文化の存在を確認した報告（1953（昭和28）年）や野尻湖周縁の地質と象化石についての論文（1956（昭和31）年）がなされるが、当時ナウマンゾウの生息年代は10万年以上前と考えられていたことから、ただちに野尻湖発掘に結び付くことはなかった。1961（昭和36）年、ナウマンゾウ臼歯の化石が発見された地層を検討していた豊野層団体研究グループと信州ローム研究会は、検証のため野尻湖底発掘を試みることとなる。

当展では、これらの論文掲載誌を展示ケース内で陳列した他、野尻湖ナウマンゾウ博物館から借用したナウマンゾウ臼歯のレプリカを展示した。レプリカと共に、1949（昭和24）年9月27日に信濃毎日新聞に掲載された、加藤松之助による化石発見についての記事を並べた。中央図書館の展示スペースで行っている企画展ということもあり、来場者には信州大学の学生が多い。野尻湖発掘について会場で初めて知る人も多いと考え、実際の発掘現場がイメージしやすいよう、長野県地図に信州大学の各キャンパスの場所と共に野尻湖の位置を示した図のパネルを用意した。ナウマンゾウ臼歯（レプリカ）以外には、1964（昭和39）年の第3次発掘で出土した石器の剝片（レプリカ）を展示した。会場ではパネルを多用し、野尻湖発掘における代表的な出土品を紹介した。また、会場内にパネルとして展示したものに井尻正二氏[5]と画家の金子三蔵氏によって描かれた復元図がある。これは第1次から第4次発掘までの成果をもとにしており、発掘前には南方系生物と考えられていたナウマンゾウが、第1次発掘で北方系と考えられていたヤベオオツノシカと共存していたこと、第2次発掘で花粉化石や放射年代から氷河期の野尻湖に生きていたことが判明した。復元図における想像上のナウマンゾウは発掘が進むにつれて、現在のゾウに近い姿からマンモスに似た姿に変化している。加えて第3次発掘で石器が発見されたことで「野尻湖人」の存在が浮かび上がり、第4次発掘後には野尻湖がキルサイト（獲物の解体場）であった可能性が描かれた。

実物の展示品としては、「野尻湖新聞」や「発掘の手びき」などの紙資料があげられる。「野尻湖新聞」は第4次発掘、第5次発掘の際に発行されたものを展示ケースに陳列した。これらも野尻湖ナウマンゾウ博物館から借用した。「野尻湖新聞」は発掘の際に情報共有のため発行される新聞で、発掘参加者全員や関係者に配布される。最初に発行されたのが第4次発掘時で、その後も発掘の度に発行されている。「発掘の手びき」は発掘の体制や手法が進展し、かつ参加者が増加したことから、野尻湖発掘全体を共有するためにつくられたもので、これも各発掘調査の際に用意される。市民参加型調査である野尻湖発掘には多くの一般参加者が関わるが、発掘自体は科学的かつ厳密に行う必要がある。そこで発掘についての知識共有のため、手引きが用意されるようになった。会場には第8次発掘の際のものを展示した。記載

内容を来場者が確認できるよう、会場には「野尻湖新聞」と「発掘の手びき」の複製を用意し、自由に手に取ることができるようにした。実際に発掘参加者が目にした内容を手に取り読めるようにすることで、来場者の発掘調査への理解が深まることを期待した。

写真４　会場に展示したナウマンゾウ臼歯（レプリカ）

３－２．野尻湖発掘と信州大学

野尻湖発掘は、信州大学がその研究の推進に大きな役割を果たした。2 つめのコーナーでは、野尻湖発掘と信州大学に関わる人物、信州大学人の活躍にスポットを当てた。

野尻湖発掘年表をコーナーの最初に展示した。この年表は 1948 年の加藤松之助によるナウマン象臼歯発見から、2023 年の第 23 次発掘までの主な出来事や出土品について記したものである。また信州大学と野尻湖発掘の関わりとして、本学に在学もしくは在任していた団長を年表の中で取り上げた。在学・在任期間と所属学部を顔写真と共に紹介した。医学部、理学部、教育学部に在学、もしくは教鞭をとっていた人物が発掘に大きく貢献したことの紹介によって、現在の学生に興味を持ってもらいたいと考えた。

会場では野尻湖ナウマンゾウ博物館から提供された、第 1 次から第 23 次発掘までの発掘参加者名簿を全て貼りだした。野尻湖発掘の参加延べ人数 86,000 人のボリューム感を見ることができる。これは野尻湖ナウマンゾウ博物館の階段に貼りだされた参加者名簿を参考に、展示会場でも同様のインパクトを感じてもらうために用意した。名簿の周辺には、実際の発掘現場の写真を並べ、参加者がどのような場所で何をしているのかを見てもらえるようにした。写真の一部は、最新の発掘である第 23 次発掘の際に、大学史資料センターが撮影したものを使用した。

発掘現場で実際に使用された道具類と発掘記念品は、インタビューにもご協力いただいた酒井名誉教授より借用した。酒井名誉教授は第 1 次から最新の第 23 次まで全ての野尻湖発掘に参加している。「魚沼ハンマー」と呼ばれるツルハシや、「信州鎌」を用いて地面を掘り起こし、手ほうきで化石周辺の土を払った。竹べら・木べらは、土を払う以外にも化石を掘り起こすために使われ、色鉛筆で発掘現場や出土品をスケッチした。発掘記念品は様々なものが作られており、会場ではショルダーバッグや第 17 次発掘の際のキャップ（帽子）、第 21 次と第 23 次発掘時の発掘参加者証などを展示した。

写真５　第 1 次から第 23 次発掘までの発掘参加者名簿

写真６　発掘現場で実際に使用された道具類と発掘記念品

トピック

当展の開催にあたり、実際に野尻湖発掘調査に参加した信州大学関係者のエピソードを収集した。エピソード提供協力の呼びかけは、大学史資料センターの Web サイトで行った。アンケートフォームを用意し、野尻湖発掘に関わった当時の所属部署・学部学科・学生もしくは教職員の別、参加した発掘の回次、参加時の作業分担（係・班）などを野尻湖発掘に関する思い出やエピソードと共に記入できるようにした。集まったエピソードは、展示会場で紹介した。学生時代に参加した卒業生、第 23 次発掘が初めての参加だったという在学生、長年野尻湖発掘調査に携わってきた方などから、多くのエピソードが寄せられた。展示準備の関係上、会場では 2023 年 9 月末までに寄せられたエピソードを紹介したが、エピソードの収集は今後も継続を予定している。当展の Web 版制作も計画しており、そちらでも収集したエピソードの紹介を行う予定である。収集したエピソードと共に、第 23 次野尻湖発掘の際に発掘現場で掲げられた東北信・信濃町友の会の旗の実物を展示した。旗に描かれたゾウは鼻と頭で第「23」次発掘を表しており、これは信大生のアイデアである。

会場では大型ディスプレイを用いて、野尻湖発掘の記録映像を 4 本上映した。そのうち「野尻湖発掘の記録（第 6 次野尻湖発掘　1973（昭和 48）年、32 分）」[6]、「野尻湖人を求めて一万人の野尻湖発掘（第 10 次野尻湖発掘　1987（昭和 62）年、34 分）」[7]、「野尻湖文化を求めて　第 13 次野尻湖発掘（1997（平成 9）年、38 分）」[8]の 3 本は発掘調査の様子を記録した映画であり、第 6 次発掘と第 10 次発掘の際には理学部地質学教室が制作に協力している。これらは NPO 法人科学映像館がデジタル配信している。発掘現場の様子を映像で見ることで、来場者の理解が深まると考えて上映した。「野尻湖発掘に参加して　ZOOM インタビュー（2023 年 10 月 13 日）」は、竹下准教授と、野尻湖発掘に参加した教育学部理科教育

コース層位構造地質学研究室の学生に大学史資料センターがインタビューした際の様子を撮影したものである。信州大学の教員だけでなく、学生も野尻湖発掘に参加していること、参加した学生の生の声を紹介できる機会として上映した。この映像を見ることで、来場者がより野尻湖発掘に興味を持つことを期待した。

写真７　野尻湖発掘調査に参加した信州大学関係者のエピソードと東北信・信濃町友の会の旗

写真８　大型ディスプレイを用いて上映した野尻湖発掘記録映像

４．おわりに　―感想・今後の課題・反省点

昨年度の展示期間中は「新型コロナウイルス感染症拡大防止のための信州大学の行動基準」に基づいた附属図書館の方針により、学外者の図書館滞在時間が 30 分以内と定められていたが、2023 年 5 月 8 日以降、新型コロナウイルス感染症の 5 類感染症移行に伴い、中央図書館では学外者利用時間の制限が解除された。学習・教育研究のための資料利用、もしくは館内展示の見学が目的であれば、誰でも利用が可能である。

2023 年 12 月 7 日に第 7 回 信州 知の連携フォーラム「記憶＜データ＞を未来へ～信州からはじまる文理融合のデジタルアーカイブ～」が中央図書館で開催され、そこで大学史資料センターの福島正樹特任教授が当展の解説を行った。フォーラムには長野県内の知と学びに関わる各種文化施設を中心として参加者が訪れ、展示解説にも 20 名以上の来場があった。フォーラム開催後に実施した参加者対象アンケートの感想を確認したところ、考古学専攻が無い信州大学の野尻湖発掘参加に感銘を受けたという声や、現在の「シチズンサイエンス」「パブリックヒストリー」に相当する取り組みが 60 年前から継続していることに注目した意見が見られた。また野尻湖発掘と信州大学の関わりに主題を絞ったことへの評価もあった。フォーラム開催時に当展が開催中であったことは、大学史資料センターの活動のアピールにもなった。大学史資料センターでは、一般来館者に向けたギャラリートークも 2024（令和 6）年 1 月 10 日に計画している。

また本学の「博物館教育論」「博物館展示論」を受講している学生 180 人が展示を見学して課題レポートを書いた。講座担当の福島特任教授によれば、今回の展示が発掘資料中心というよりも野尻湖発掘を支えた人々など調査の裏側や歴史について行われたことに着目した学生が多数おり、本展示の趣旨が学生に理解されたことは重要な成果であった。

なお第 1 次～第 4 次発掘において事務局局長を務めた教育学部・斉藤豊講師の野尻湖発掘関連資料および事務局資料の所在を調査したが、現時点では発見できていない。今後の課題として、継続的な調査が必要といえる。

限られた展示スペースで開催した展示ということもあり、展示内容が限定的となったことが反省点としてあげられる。野尻湖発掘の概要、調査団の歴史や実績などに比べ、発掘調査と信州大学の関係性の紹介は内容を掘り下げることが難しかった。ただ、展示会場に設置したアンケート用紙には、以前野尻湖発掘に参加した信州大学卒業生からの回答も見られた。今回の展示を機会として、野尻湖発掘に参加する信州大学の学生・関係者がさらに増えることを期待したい。

謝辞

当展の開催にあたっては多くの方々の協力を得た。感謝の意を表する。

ご助言、ご協力をいただいた皆様（五十音順）
赤羽貞幸信州大学名誉教授、教育学部理科教育コース層位構造地質学研究室、酒井潤一信州大学名誉教授、竹下欣宏信州大学准教授、野尻湖ナウマンゾウ博物館　近藤洋一館長、野尻湖発掘調査団（笹川一郎団長）

展示資料の借用にご協力いただいた皆様
酒井潤一信州大学名誉教授、東北信野尻湖友の会事務局、野尻湖ナウマンゾウ博物館

また、当展の企画は大学史資料センターの福島正樹が中心となって行い、附属図書館館長東城幸治教授を始め、多くの職員の協力を得て開催が実現した。

注

1）企画展「SUNS－人をつなぐ・キャンパスをつなぐ－」（Web 版）、エピソード集
<https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/archives/news/news/sunsweb.html>（参照 2024-01-12）
<https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/archives/news/display/suns-7.html>（参照 2024-01-12）

2）企画展「SUNS－人をつなぐ・キャンパスをつなぐ－」実施報告
<https://hdl.handle.net/10091/0002000728 >（参照 2024-01-12）

3）企画展「明治・大正期 信濃博物学の夜明けと長野県師範学校 －矢澤米三郎とライチョウ標本を中心に－」（Web 版）
<https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/archives/news/display/-web.html>（参照 2024-01-12）

4）企画展「明治・大正期 信濃博物学の夜明けと長野県師範学校 －矢澤米三郎とライチョウ標本を中心に－」実施報告
<https://hdl.handle.net/10091/0002001328 >（参照 2024-01-12）

5）野尻湖発掘の最初の提案者。1961（昭和 36）年 8 月に豊野層団体研究グループが野外調査で野尻湖産ナウマンゾウ化石の産出層準の議論を行っていた際に、野尻湖湖底を発掘することを提案した。

6）NPO 法人科学映像館　「野尻湖発掘の記録」
<https://www.kagakueizo.org/movie/animal/212/>（参照 2024-01-12）

7）NPO 法人科学映像館　「野尻湖人を求めて　一万人の野尻湖発掘」
<https://www.kagakueizo.org/create/other/213/>（参照 2024-01-12）

8）NPO 法人科学映像館　「野尻湖文化を求めて　第 13 次野尻湖発掘」
<https://www.kagakueizo.org/movie/animal/293/>（参照 2024-01-12）

当展参考文献

野尻湖発掘調査団（1975）『野尻湖の発掘　1962-1973』井尻正二監修，共立出版.
野尻湖発掘調査団（1975）『野尻湖の発掘写真集』共立出版.
野尻湖発掘調査団（1978）『ぼくらの野尻湖人：ジュニアのためのガイドブック』井尻正二・星野通平監修，講談社.
野尻湖発掘調査団（1984）『野尻湖の発掘写真集 2』共立出版.
野尻湖発掘調査団（1986）『一万人の野尻湖発掘：たのしい仲間づくり』築地書館.
野尻湖発掘調査団（1992）『増補版　象のいた湖：野尻湖発掘ものがたり』新日本出版社.
野尻湖発掘調査団（2011）『野尻湖人をもとめて：野尻湖発掘 50 年記念誌』野尻湖ナウマンゾウ博物館.
野尻湖発掘調査団（2018）『野尻湖のナウマンゾウ：市民参加でさぐる氷河時代』新日本出版社.
信濃毎日新聞社（1984）『野尻湖人を追って』
野尻湖ナウマンゾウ博物館（2003）『ナウマンゾウの狩人をもとめて』.
土屋正臣（2017）『市民参加型調査が文化を支える：野尻湖発掘の文化資源学的考察』美学出版.
地学団体研究会・野尻湖発掘調査団編（1984）『専報 27 号　野尻湖の発掘 3（1978-1983）』.
地学団体研究会・野尻湖発掘調査団編（1974）『専報 32 号　野尻湖の発掘 4（1984-1986）』.
地学団体研究会・野尻湖発掘調査団編（1990）『専報 37 号　野尻湖の発掘 5（1987-1989）』.
信濃町立野尻湖博物館（1993～1996）『野尻湖博物館研究報告』（第 1 号～第 4 号）.
野尻湖ナウマンゾウ博物館（1997～2020）『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』（第 5 号～第 28 号）.

2023(令和5)年11月3日
信州大学大学史資料センター

2023年秋季企画展「野尻湖発掘を支えた信州大学の人びと」　展示解説

はじめに

日本では第二次世界大戦後、学術研究の民主化が叫ばれ、地質学分野では、1947(昭和 22)年、地学団体研究会(地団研)が結成されました。考古学、人類学等の各分野との学際的・横断的研究が、1950 年代～60 年代に全国のいくつかのフィールドで始まり、そうしたフィールドの一つである野尻湖発掘では、信州大学がその研究の推進に大きな役割を果たしました。

今回の企画展では、野尻湖発掘を概観するとともに、信州大学人の活動を取り上げ、学術研究にどのように貢献したのかについて展示します。

Ⅰ　野尻湖発掘概観

発掘前史

1962(昭和 37)年、現在にまで続く野尻湖発掘調査が始まりました。この発掘調査が開始される前提には、戦前からの信州をフィールドとした地質学、生物学など博物学研究によって蓄積されてきた学際的研究の伝統と、それを支える教育的基盤(長野県師範学校と信濃教育会・教員の自主的研究)の伝統がありました。

1　田中阿歌麿・平澤福松「野尻湖に就て(其一)」「野尻湖に就て(其二)」(『信濃博物学雑誌』(27)(28)　信濃博物学会　1907(明治40)年、1908(明治41)年)　信州大学附属図書館蔵

野尻湖に関する最初の学術論文。田中阿歌麿(1869-1944)は、国内の主要湖沼を初めて科学的に調査し、日本の湖沼学・陸水学を開拓した。掲載した『信濃博物学雑誌』は長野県の初等教育の教員を中心に組織された信濃博物学会の機関誌。地方の研究会でありながら全国レベルの研究が行われた。

2　田中阿歌麿『野尻湖の研究』(信濃教育会上水内部会　1926(大正15)年)　信州大学附属図書館蔵

資料1の論文の成果を含む野尻湖に関する地質・生物から考古学、民俗・伝承、生活にいたるまでの学術的総合研究。発行の母体は信濃教育会上水内部会。田中を中心に長野県の教員が調査研究を支えた。

3　芹沢長介・麻生優「北信・野尻湖底発見の無土器文化(予報)」(『考古学雑誌』39 巻 2 号　日本考古学会　1953(昭和28)年)　信州大学附属図書館蔵

野尻湖の湖底に無土器文化の存在を確認した。あわせてナウマンゾウの臼歯の存在を初めて報告したもの。ナウマンゾウの出土層位と石器出土層位の関係の究明に言及するが、ただちに野尻湖発掘に結び付くことはなかった。

4　富沢恒雄「長野県北部野尻湖周縁の地質と象化石」(『地質学雑誌』731 号　日本地質学会　1956(昭和31)年)　信州大学大学史資料センター蔵

1948(昭和 23)年、加藤松之助がナウマンゾウ臼歯(資料5)を発見した。翌年地質学者八木貞助の「10万年前の

象の歯」とのコメントが信濃毎日新聞に掲載されたが、正式な学術報告としてはこの論文が最初であった。富沢は長野県の高等学校の理科教員。

発掘への準備

1961(昭和36)年夏、ナウマンゾウの臼歯の化石が見つかった地層を検討していた豊野層団体研究グループ、信州ローム研究会の研究者は、確かめるためには「まず掘ってみよう」という地質・古生物学者井尻正二の提言をきっかけにして野尻湖底を発掘することにしました。同年 12 月、「野尻湖発掘実行準備委員会」が結成され、信州大学教育学部の斉藤豊を総責任者とし、合計 8 名によって準備が進められました。第一次調査は、信州大学医学部鈴木誠を団長に1962(昭和37)年3月26日から28日までの3日間行われ、それ以後1965(昭和40)年の第4次発掘調査まで毎年行われました。

5 ナウマンゾウの臼歯(レプリカ) 1948(昭和23)年採集 野尻湖ナウマンゾウ博物館蔵

1948(昭和 23)年、野尻湖畔の旅館の主人加藤松之助が発見したナウマンゾウの臼歯。資料 4 の富沢論文により学術報告がされ、ナウマンゾウの上顎第三大臼歯であることがわかり、野尻湖発掘への手掛かりとなった。

6『信州ローム』No.4 - No.8 (1958(昭和33)年～1963(昭和38)年) 信州ローム研究会 信州大学大学史資料センター蔵(卒業生寄贈)

信州大学医学部第二解剖学教室に事務局を置いた信州ローム研究会が発行した雑誌。医学部の鈴木誠を中心に、人類が登場した第四紀の地質・地形・人文地理・人類・考古・生物の各学術分野を関心の対象とした研究会。信州大学教育学部の斉藤豊を中心とした信州大学出身者からなる豊野層団体研究グループとともに第 1 次から第 4 次の野尻湖発掘を支えた。

発掘のはじまり

「まず実践、掘ってみよう」を合言葉にナウマンゾウ臼歯化石の産出層準を探ることを目的に始まりました。発掘が進む中で野尻湖層と命名するとともに、当時が最終氷期の寒冷期にあたっていたこと、旧石器の剥片の出土から人類との関わりが課題となりました。

7 発掘調査で初めて出土した石器の剥片(レプリカ) (1964(昭和 39)年) 野尻湖ナウマンゾウ博物館蔵

石器作成の際の剥片。無斑晶質安山岩製。ナウマンゾウと同時代に石器製作を行う人類がいた可能性を示す初めての資料。第3次の発掘調査で出土した。

8『野尻湖新聞』(第4次発掘) 3月26日号～3月29日号 (1965(昭和40)年3月) 野尻湖ナウマンゾウ博物館蔵(仁科良夫資料)

初めて発行された野尻湖新聞。発掘調査期間中の 3 月 26 日から 29 日まで 4 号が発行され、参加者全員に情報共有のために配布された。以後、各発掘調査に際して発行された。

9「氷河時代の日本」展図録 (読売新聞社 1965(昭和40)年) 信州大学大学史資料センター蔵

第 4 次発掘後、成果を公表するために、東京・伊勢丹百貨店、大阪・阪神百貨店、諏訪・丸光百貨店で展示会を開催した。展示資料は伊勢丹開催時のもの。

10『野尻湖のぞう』（福音館書店 1969(昭和44)年11月） 信州大学大学史資料センター蔵
文章：井尻正二、挿絵：金子三蔵。第1次から第4次までの発掘の成果を子どもたちにもわかるような形でやさしく解説している。1976（昭和51）年に新版が出され、現在も新刊で入手できる。

発掘の再開

1965（昭和 40）年の第 4 次発掘以後、1973（昭和 48）年まで、発掘は中断しました。発掘再開には周囲の研究状況の進展がありましたが、特に文部省科学研究費による第四紀総合研究が再開にあたって果たした役割は大きいものがありました。

11『第四紀』No.18 第四紀総合研究連絡誌 野尻湖発掘特集号 （1973(昭和48)年1月） 信州大学大学史資料センター蔵
本資料は、第 5 次発掘を実施するための準備資料で、第四紀総合研究の一環として発行された。地形・地質、花粉化石、ナウマンゾウ・オオツノシカ、石器などの各分野から報告がなされている。編集後記の文末は、「野尻湖で会いましょう！」で結ばれている。

12『野尻湖新聞』(第５次発掘） （野尻湖新聞社 1973(昭和48)年３月） 野尻湖ナウマンゾウ博物館蔵(仁科良夫資料)
第 5 次発掘に際し発掘情報を共有するために発行。参加者や関係者に配布された。発掘開始前日の No.1 から終了後の No.8まで発行された。

13『発掘の手びき』第８次野尻湖発掘 1981.3.24～4.2（野尻湖発掘調査団 1981(昭和56)年２月） 信州大学大学史資料センター蔵
発掘の体制や手法が進展し、かつ参加者が増加したことから、野尻湖発掘全体を共有するための手びきが作られた。発掘のてびき、記載の手びき、発掘運営ハンドブックなど、調査年次ごとに作成、友の会会員に配布された。

Ⅱ 野尻湖発掘と信州大学

発掘の歩み

野尻湖発掘60年の歩みは、第1期から第５期に分けることができます。1962（昭和37）年から65（昭和40）年の第 1 期では「まず実践」を合言葉に試行錯誤の調査が行われ、その後の調査の基本が据えられました。発掘調査を質的に変え、現在に続く調査体制ができたのが第 2 期の第 5 次調査で、これを契機に信州大学に事務局を置き、大勢の参加を得た発掘調査の体制が整えられました。その後は出土する様々な資料の情報を確実につかむための調査手法の深化によって、さらに新しい課題の設定と新事実の認識という好循環が生まれていきました。そして、2001（平成 13）年、地元野尻湖ナウマンゾウ博物館に事務局が移転することで中期計画に基づく調査、成果の公表など、博物館を拠点とした持続可能な体制が整えられ、発掘開始 100 年を目指した調査が進められています。

発掘を支えた人びと

野尻湖発掘は、1962（昭和 37）年に第 1 次発掘が始まり、2023（令和 5）年の第 23 次発掘まで続いています。発掘参加人数は延べ86,000 人を超え、野尻湖人をもとめて子供から大人までが手弁当で集まり、60 年も

の間つながってきています。それは、参加者一人ひとりと運営を支えてきた多くの人の力があったからです。なかでも、信州大学の研究者や学生たちが大きな役割を果たしてきました。

14 地団研 長野支部報 No.20（信州大学教育学部地学教室 1966(昭和 41)年 5 月）野尻湖ナウマンゾウ博物館蔵(仁科良夫資料)
1965(昭和 40)年の再結成を契機に発行された地学団体研究会長野支部の会報。掲載された会員名簿から、小中学校の教員と教育学部の学生が中心であったことがわかる。

15『長野県野尻湖のナウマン象化石をめぐる問題点』（豊野層団体研究会・信州ローム研究会1962（昭和 37)年 3 月）野尻湖ナウマンゾウ博物館蔵(仁科良夫資料)
第 1 次発掘を支えた豊野層団体研究グループと信州ローム研究会が、発掘準備のために作成した冊子。発掘の意義と目的、地質、化石、考古の各分野からの問題提起、参考文献、発掘計画から構成されている。

16『掘って掘ってまた掘って―まんが野尻湖発掘ものがたり―』（野尻湖発掘調査団 講談社 1983(昭和 58)年 3 月 第 1 刷発行 2000(平成12)年 3 月 第 6 刷発行） 信州大学大学史資料センター蔵
まんが(絵:伊東章夫)によって野尻湖発掘をわかりやすく解説。各地の友の会が分担して執筆している。

17 発掘アンケート 1973(昭和 48)年 3 月 26 日（発掘調査団本部苦情うけたまわり係）野尻湖ナウマンゾウ博物館蔵(仁科良夫資料)
発掘調査がスムーズに進められるよう、発掘調査団本部苦情うけたまわり係が小学生から大人までを対象に行ったアンケートの用紙。設問は全員、小中高生、大人に分けて作られている。

18 第 5 次野尻湖発掘参加申込書 （1973(昭和48) 年） 野尻湖ナウマンゾウ博物館蔵(仁科良夫資料)
1973(昭和 48)年 1 月 15 日締切の発掘参加申込書。

19 仁科良夫様 受付番号 37(第 5 次発掘参加受付通知）（1973(昭和48) 年）野尻湖ナウマンゾウ博物館蔵(仁科良夫資料)
発掘調査参加の受付番号、必要経費、所属する班名、班の責任者名を知らせている。

20 発掘時の道具 酒井 潤一氏蔵
つるはし:新潟県の鍛冶屋の特注品。本来の用途は山菜掘りの道具。
信州鎌:江戸時代から古間村・柏原村(現信濃町)で作られた特産品の鎌。本来は草取り用だが、発掘では地面を薄くはがすために使われる。
手ぼうき:削った地面を観察するために不要な砂や土を払うために用いる。
竹べら・木べら:出土した化石等の土を払ったり、化石等をはがす際に用いる。
色鉛筆:発掘現場で遺跡や遺物をスケッチする際に用いる。

21 発掘記念品 酒井 潤一氏蔵
ショルダーバッグ、帽子(第 17 次発掘)、鉛筆、参加者証、名札。さまざまな記念品が作られた。

22 東北信・信濃町友の会の旗 第 23 次野尻湖発掘 （2023(令和 5)年 3 月）東北信・信濃町友の会蔵

友の会ごとに作られる旗は、参加者が発掘への意気込みなどを書き込み、発掘期間中は竿に付けて現場に掲げられる。ゾウの鼻と頭で第「23」次発掘を表したのは学生のアイデア。

トピック

＜発掘調査に参加した人びとの思い出＞（展示パネル参照）
＜野尻湖発掘の記録映像＞（会場設置の映像装置）
＜発掘調査団組織図、全国野尻湖友の会＞（展示パネル参照）

おわりに

1962（昭和 37）年から 60 年にわたって続けられてきた野尻湖発掘。研究はみんなで平等の立場で行うこと、地元との関係を大切にすること、発掘によって得られた成果を共有する中で新しい課題を見出すこと、友の会と専門グループの有機的なつながりの中で、参加者がそれぞれの役割を見出して主体的に参加すること、これらが野尻湖発掘を支えてきた基本的な姿勢で、「野尻湖方式」と言われています。このフラットな調査・研究体制を支えたのが信州大学の教員、学生、卒業生でした。ナウマンゾウの臼歯の出土層位の確認から始まった発掘調査は、旧石器時代の人類が野尻湖周辺に実在したことの証明を課題に掲げるに至っています。60 年の歴史を踏まえつつ、基本に立ち返って発掘体制の再点検を行い、多くの人に発掘の魅力を伝え、中期計画に基づく調査を進め、より多くの人と情報を共有するためのデータの公開とデータベースの構築などを課題として次の 60 年へと歩み始めています。これまでにも増して、信州大学人の活躍がいっそう求められています。

（参考文献　書店や図書館で手に入りやすいものをあげました）
・野尻湖発掘調査団著『野尻湖のナウマンゾウ－市民参加でさぐる氷河時代－』（新日本出版社　2018年）
・野尻湖発掘調査団著『増補版　象のいた湖－野尻湖発掘ものがたり－』（新日本出版社　1992年）
・野尻湖ナウマンゾウ博物館著『ナウマンゾウの狩人をもとめて』（野尻湖ナウマンゾウ博物館　2013年）
・井尻正二・金子三蔵著『新版　野尻湖のぞう』（福音館書店　1976年）

専門的な情報を知るためには、野尻湖ナウマンゾウ博物館が毎年発行している、
・『野尻湖博物館研究報告』（1号～4号　1993年～1996年）
・『野尻湖ナウマンゾウ博物館研究報告』（5号～30号　1997年～2022年）
を参照ください。

付記
野尻湖ナウマンゾウ博物館・野尻湖発掘調査団から資料・情報の提供をいただき、展示に関するご教示もいただきました。特に野尻湖ナウマンゾウ博物館長近藤洋一氏、元調査団長・信州大学名誉教授　酒井潤一氏・赤羽貞幸氏、信州大学教育学部准教授竹下欣宏氏には多くの情報をいただきました。なお、野尻湖発掘をテーマに市民参加の調査について研究した土屋正臣著『市民参加型調査が文化を変える―野尻湖発掘の文化資源学的考察』（美学出版　2017年）は、本展示を実施するに際して参照しました。

（文責：福島正樹）